



Title	第65 回 意匠学会大会報告
Author(s)	谷本, 尚子
Citation	デザイン理論. 2024, 83, p. 86-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93430
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第 65 回 意匠学会大会報告

第 65 回大会は京都精華大学にて、YouTube 配信による公開オンデマンドを含むハイブリッド形式にて開催された。大会の参加申し込みや参加費はオンライン入金システムを導入した。当初は対面のみを予定していたが、遠隔視聴の希望があったので、ハイブリッド形式の開催となった。

また子育て世代が研究会に参加しやすい環境を整えたいと思い、今回はじめて「保育スタッフ派遣サービス」を利用した。

協力・共催：実行にあたり、京都精華大学から協力として「学会等補助金交付」を受けた。エクスカーション及びシンポジウム実行にあたり、京都精華大学伝統産業イノベーションセンターによる共催を受けた。補助金には、「保育スタッフ派遣」及びエクスカーションのためのマイクロバスの費用などが含まれる。

研究発表・パネル発表：研究発表 12 件、パネル発表 6 件があった。今回、研究発表が初めての会員が 5 名含まれており、学会の今後の発展に寄与するものと期待したい。また、大会参加者に一般参加者が 3 名含まれており、大会参加申込及び参加のオンライン化にはそれなりの意味があったと報告する。ただし、オンライン実施のための経費が 20 万円を超えていることを考えると、オーバースペックであった事を認めざるを得ない。

エクスカーション：エクスカーションは陶芸家石黒宗磨（1893-1968）の八瀬の自宅兼陶窯を訪問した。10 時に国産会館駅集合、チャーターバスにて八瀬陶窯へ移動。石黒は、1936 年に京都市左京区八瀬に築窯し、晩年までこの地を拠点に陶器を作り続けた。1956 年には自身の工房が後進の陶芸家の研究の場となるべく「財団法人 八瀬陶窯」を設立した。石黒の没後、八瀬陶窯は関係者の管理を経て、2003 年からは京都精華大学が施設管理を行なっている。静かな集落の中にあり、一軒家ということもあり、見学者は 30 名程度に人数制限した。

シンポジウム：シンポジウムはエクスカーションと同様、本学伝統産業イノベーションセンターとの共催であり、会員以外の参加者も多く参加していた。テーマは「八瀬陶窯から芋づる Dig up Yase Toyo Kiln」であった。登壇者は、哲学者、デザイナー、陶芸研究者、陶芸家の 4 人であり、五条坂を中心とした京焼の陶工たちと石黒の交流・影響関係を探り、また伝統工芸を新たな視点から継承している先行事例として、福島県昭和村におけるからむし織の体験生と村人との協働や、郷土玩具の本地師や福祉施設との協働による実験的な玩具制作のアプローチを見ながら、伝統産業の現在について、広くディスカッションされた。

（谷本尚子 記）



パネル発表



シンポジウム



懇親会風景

第 65 回 意匠学会大会

日 時：2023 年 8 月 24 日（木）・25 日（金）・26 日（土）

会 場：京都精華大学 明窓館 大ホール

参加費：会員 1,000 円／非会員 2,000 円／学生 0 円

共 催：京都精華大学伝統産業イノベーションセンター

協 力：京都精華大学

大会実行委員会：谷本尚子（委員長）／蘆田裕史／前田 茂／益岡 了

第 1 日目 2023 年 8 月 24 日（木）

開会挨拶：京都精華大学学長 澤田昌人 ————— 12：45～13：00

第 1 セッション テーマ：流通するイメージ 司会：村井陽平 ————— 13：00～14：00

研究発表 01 個人デザインコレクションの経緯に関する研究

—— 織田コレクションを事例として

辻川愛理（滋賀県立大学大学院在学）

研究発表 02 空間の記憶の共創：

甲子園 —— 聖地の生成と象徴性再生産プロセスに対する住民評価の研究

森田雅子（武庫川女子大学）

大井佐和乃（関西学院大学）

第 2 セッション テーマ：評価の視点 司会：神野由紀 ————— 14：10～15：10

研究発表 03 プライヴェートプレス運動におけるエラニープレス

今井美樹（大阪工業大学）

研究発表 04 洋菓子の「清新な」味とそのデザイン

—— 明治製菓 PR 誌『スエート』を手がかりに

前川志織（京都芸術大学）

第 3 セッション テーマ：異文化の交流 司会：三木順子 ————— 15：30～16：30

研究発表 05 18 世紀英国の紅茶文化形成期における茶道具の受容

石田佳子（株式会社 NHK 文化センター）

研究発表 06 近代日本の海外美術品の仲介者と場

山本真紗子（日本学術振興会特別研究員（RPD））

研究発表 07 19 世紀アルハンブラ宮殿の修復

—— 他国からのまなざしによる変容

佐藤紗良（日本学術振興会特別研究員（PD））

第2日目 2023年8月25日(金)

第4セッション テーマ：デザインの現在 司会：上田 香 ————— 10:00~11:00

- 研究発表 08 「upcycle」を巡る考察
成 詩羽(セイ シウ)(京都精華大学大学院在学)
- 研究発表 09 既存のジェンダーレスデザインの批評と検討
宮川駿介(京都工芸繊維大学大学院在学)

パネ ル 発 表 司会：佐藤博一 ————— 11:30~12:30

- パネル発表 01 饒舌な静寂 ― 無声映画「泡沫少女」の脚本
高橋紀子(脚本家名：小鶴乃哩子)(福井工業大学大学院在学)
- パネル発表 02 西陣織による Generative Design
上田 香(嵯峨美術大学)
- パネル発表 03 生分解性樹脂を用いたイベント用トレーの開発
村井陽平(同志社女子大学)
川島洋一(福井工業大学)
- パネル発表 04 京都に伝わる絣織
― 「いとへん universe」が提案するテキスタイルとしての西陣絣
白須美紀(京都女子大学研修員)
- パネル発表 05 ユニセックス・ファッションに向けたデザイン画
王 怡(ワン イ)(滋賀県立大学大学院在学)
- パネル発表 06 津軽三味線と漆芸の融合 ― KOGEI Next 監修エレキ三味線《Lycoris》
田畑絵梨奈(京都女子大学大学院在学)
前崎信也(京都女子大学)

第5セッション テーマ：素材と形 司会：川島洋一 ————— 14:00~15:30

- 研究発表 10 「杢」を通した木材の意匠性に関する考察
泊里涼子(武庫川女子大学)
- 研究発表 11 網代輿の木部のつくり
― 聖護院蔵「御車輿」の木部構造模型の制作からわかること
落合里麻(東北生活文化大学)
- 研究発表 12 和楽器の持続可能性
― KOGEI Next 監修エレキ三味線《Lycoris》の制作を通して
前崎信也(京都女子大学)
田畑絵梨奈(京都女子大学大学院在学)

総 会(学会表彰式含む ※意匠学会員のみ参加可能) ————— 16:00~17:00

懇親会(宝ヶ池公園 BBQ) ————— 18:00~20:00

第 3 日目 2023 年 8 月 26 日 (土)

エクスカーション 八瀬陶窯見学 ————— 10 : 00 ~ 12 : 00

シンポジウム 八瀬陶窯から芋づる | 工芸から覗く未来 ————— 13 : 30 ~ 16 : 40

閉 会 挨拶 高安啓介 (意匠学会会長) ————— 16 : 45 ~ 16 : 55

シンポジウム報告

テーマ：工芸から覗く未来

パネリスト：

清水愛子（意匠学会会員）

五条坂の陶芸家を中心に研究活動を行っている。論文に「石黒宗麿と京窯」—— 京都蛇ヶ谷・八瀬における創作活動と生活 —— など。

鞍田 崇（哲学者・明治大学理工学部准教授）

ローカルスタンダードとインティマシーという視点から、現代社会の思想状況を問う。著作に『民藝のインティマシー「いとおしさ」をデザインする』（明治大学出版会 2015）など。

軸原ヨウスケ（グラフィックデザイナー）

あそびをテーマにしたデザインユニット COCHAE（2003 年～）のメンバー。「アウトオブ民藝」という名称で活動进行。

司 会：中村裕太（美術家・伝統産業イノベーションセンター員）

「民俗と建築にまつわる工芸」という視点から陶磁器、タイルなどの学術研究と作品制作を行なう。『アウト・オブ・民藝 | ロマンチックなまなざし』（共著，誠光社，2022 年）など。

シンポジウムのテーマ「八瀬陶窯から芋づる 工芸から覗く未来」では、石黒宗麿の八瀬陶窯を出発点に、伝統工芸遺産をどのようにして残し、その価値をどのように形作るかについて、さまざまな専門家によって事例紹介がなされ、その後座談会の形で意見交換がなされた。進行は以下の通り。

- インTRODakShIOn 中村裕太 石黒宗麿と八瀬陶窯について
- プレゼンTেশIOn
 - ▶ 清水愛子 京焼と石黒宗麿（1893-1963）
 - ▶ 鞍田 崇 百姓の仕事
 - ▶ 軸原ヨウスケ 「福祉と玩具と工芸」の着想
- 座談会

概要

中村氏のINTRODUCTIONでは、本シンポジウムの目的などを概説した後、伝統産業イノベーションセンターが行ってきた八瀬陶窯の調査研究について報告した。調査の成果として次の二つの展覧会が紹介された。2018 年ギャラリーフロールで行った「石黒宗麿と八瀬陶窯 —— 五〇年目の窯出し ——」展では、八瀬陶窯の調査結果を報告するものだった。2020 年京都国立近代美術館コレクション・ギャラリーにて開催された「新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」「ツボ__ノ__ナカ__ハ__ナンダロナ？」展では、美術家・視覚障害の方・学芸員の3者が石黒の陶片を鑑賞するという新たな鑑賞方法を探る視点で紹介された。さらに八瀬陶窯の現状と課題について問題提起がなされた。

清水氏は「京焼と石黒宗麿（1893-1963）」というテーマで、石黒が京都で焼物に関わった時代（昭和2、3 年～昭和43 年）の陶芸界の状況について解説した。当時は帝展（日展の前身）で美術工芸という

枠組みが出来、工芸も出品できる様になり、創作、オリジナリティが求められるようになった。審査員の 6 代清水六兵衛は、紋様の世界に移り、展覧会に出品するために大ぶりのものを作る様になる。当時の京焼には、大型化、作る難しさ、シャープさ、洗練されたものが求められた。他方で河井寛次郎のように民藝に向かう方向に向かうものもいた。京焼の重鎮の一人、八木一舄（八木一夫の父）は、石黒を精緻な作品を作る人として評価している。さらに八木一夫は、古陶磁を追った石黒の陶器作りには、石黒なりの解釈があることを見出していた。

鞍田氏は「百姓の仕事」というタイトルで、石黒の言葉「百姓になったような人間になりきらないと、土がいうことをきいてくれない」を出発点に、百姓の仕事の価値を民藝作家たちが注目していたことに着目する。そうした営みの一つとして、奥会津昭和村で行われている「からむし織」の実践を例に、現在の農と民芸との関係についての事例が紹介された。また鞍田氏は、「ムジナの庭（就労継続支援 B 型施設）」において福祉と民芸の協働を実践している。

軸原氏は、民藝玩具と関連したこれまでの自身のデザインを紹介した後、「福祉と玩具と工芸」の着想」というタイトルで民芸の現在を論じた。まず民芸の社会的役割という視点で、山本鼎の農民美術運動や郷土玩具という雑誌を出版した有坂與太郎、そして宮澤賢治「農民芸術綱要」などの農民美術運動の流れを紹介した後、民芸運動と福祉活動との接点を見出した例として、山下清を支えた精神科医式場隆三郎や鳥取の児童発達支援施設皆成学園で子供達に制作させた一心焼の事業を進めた民芸運動家で医師の吉田璋也の活動を取り上げた。

さらに軸原氏自身の活動として、福祉施設での試行錯誤が紹介された。民芸復活事例としては、岡山の久米土人形、鳥取県倉吉市の嘉久籬、香川県永井だるまなどの例が挙げられ、現在は岡山県鳴子温泉のこけしを福祉施設で実験的に復活を試みている。

パネルディスカッションでは、まず司会の中村氏から八瀬陶窯の今後の活かし方について意見交換が求められた。石黒は民芸を嫌っており、京都に移り住んでから後も技法研究に取り組み、古陶磁を教材として製陶研究に励んだ。石黒が八瀬に窯を構えたのは昭和 11（1935）年、暮らしと作陶の場として八瀬の地を選んだ理由などが、話題として上がった。

鞍田氏は、八瀬陶窯の建物を再生したのに対して、敷地の中のまだ手付かずの状況である畑の再建を提案する。ここから当時の陶芸家達の生活の周辺についての意見交換がなされた。

「焼物はそれ自身で考えられるが、庭や建物の背景から生まれてくるものではないのか。生態系的に八瀬東洋を考えるべきではないか。」「八瀬陶窯の佇まいは八瀬の伝統的生活に馴染んでいる。」といった意見が出された。

続いて会場から、八瀬の地域社会との共同活動の提案がなされた。今後は大学の活動として幅広く実施していくことが検討されるべきであろう。

石黒の生前を知る参加者から、「当時、農業をするということは、せざるを得なかったのではないかと」の指摘があった。石黒が畑仕事をしていたのではなく、奥さんと弟子が畑をしていたのだという。農業によって土と親しむことを直接的に作陶と結びつけてはいけないという戒めは貴重だ。

八瀬陶窯の事例を出発点に、伝統工芸遺産をどのように活かしていくのか、或いは現在の民藝の現場がどのように継続を考えるべきなのかが具体的に検討されたと言えるだろう。モノ以上により社会的な視点が必要になって来たことが再確認された。